

氏名	清水 泰行
学位の専攻分野の名称	博士（言語学）
学位記番号	甲文第164号（文部科学省への報告番号甲第553号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2015年2月27日
学位論文題目	現代語における感情用言の形式と意味
論文審査委員	（主査）教授 大鹿 薫 久 （副査）教授 小倉 肇 金水 敏（大阪大学教授）

論文内容の要旨

本論文は、感情を表す形容詞や動詞（清水泰行氏はこれらを一括して「感情用言」と呼ぶ）を述語に持つ文について、従来あまり注目されてこなかったいくつかの現象を取りあげ、これらが動詞文と形容詞文の境界的な領域でおこる周縁的な現象であることを実証的に位置付け、感情用言の構造を解明しようとした論考である。

本論文は五章から構成されている。第一章では、感情動詞を、それらが支配する格のバリエーションから分類し、二格をとる感情動詞において格と意味役割の間にズレが生じているグループがあること、このズレは従来指摘されてきた受身が可能な感情動詞という点からだけではなく、引用構文における引用内容と二格名詞句との関係からも指摘できることを示し、さらに二格とヲ格を両方とる場合、「喜ぶ」という感情動詞がとる二格名詞句とヲ格名詞句を調査し、その意味的な含意に明らかな差のあることを実証的に示した。

第二章では、「私は、もう、船が飽き飽きしました」（芥川龍之介『MENSURA ZOILI』）のような、文脈がなければあまり自然な日本語文とは言えない文（「船に飽き飽きしました」ならごく自然な文になる）を取りあげ、この文における「船が」のような格を「感情動詞の特異なガ格」と名付けて、感情形容詞文の構文的特徴との類似に着目し、これらの文の「出現条件」を明らかにしている。また、この条件が成立する理由について、感情形容詞文との対応と「ガ格」の用法という点から説明し、感情動詞文と感情形容詞文との構文的な近接性乃至は交渉を示唆する。

第三章では、「十分間、時間を欲しいの」（村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』）のように、ヲ格をとる感情形容詞について、その「出現条件」を明らかにするために、感情形容詞を語構成の観点から分類し、検討する。その結果、ヲ格をとる感情形容詞は感情動詞から、接尾辞を下接して派生したものであること、元になる感情動詞がヲ格をとり、かつヲ格名詞句がモノを表すことを明らかにする。そして、これは「食べたい」や「読める」のような述語がヲ格とガ格の交代を許す現象と並行的であることを指摘し、補文構造や単文構造から、ヲ格をとる感情形容詞文について統語的な説明を与えている。

第四章では、「孫が喜ぶ顔（が/を）見たさに豪華なおもちゃを買った」「地元企業（φ）かわいさに税金を減免する」などのようなサニ構文（前者、格助詞が明示される構文）、一語化構文（後者、格助詞が現れない構文）を取りあげ、現代語においてもサニ構文が「～タイ+サニ」「欲しサニ」の場合に現れることを新聞を主としたデータベースを用いて実証し、その上で格助詞が出現しやすい環境として、①「～サニ」を構成する用言が補文構造を持つ場合、②「～サニ」を構成する用言がとる名詞句に修飾句がある場合、③補

文内の動詞のとる名詞句が指示代名詞である場合、という三つがあることを大量のデータから明らかにした。さらに「金が欲しさ」が複合化することで「金欲しさ」という語が形成されるというプロセスを想定し、このプロセスを妨げるように働くのが上記①～③の環境であると結論づけた。

第五章では、「軽っ／長っ／おじいちゃん、若っ」や「彼氏、欲しっ／お酒が飲みたっ」のように形容動詞語幹が声門閉鎖を伴って発話され、感動文となるものを取りあげ、従来統語上の主語であるとされることのあった要素が「即応性」「対他性」という点から「主語」ではなく「感動の対象」であり、その提示として機能していることを論じる。さらに感情形容詞の語幹を用いる感動文では、「ガ格」を伴う場合と伴わない場合があり、この現象と第四章で考察した「サニ構文」「一語化構文」との平行性が指摘されている。

論文審査結果の要旨

本研究は、清水泰行氏が「感情用言」と呼ぶ語類を述語として持つ文について、それらの見せるいくつかの文法的な振る舞いが動詞文と形容詞文の境界領域でおこる周縁的な現象であることを実証的に位置付け、感情用言文の構造の一端を解明しようとした意欲的な研究である。従来、所謂情意形容詞とか心理動詞とか呼ばれる一群の形容詞や動詞が述語となる文では、典型的な形容詞文や動詞文とは異なる現象が観察されることが指摘され、それぞれ形容詞文や動詞文の構文研究の一環として言及がなされたり、考察の対象とされてきた。しかし、清水氏はこれらの特異な、あるいは副次的ともいえる現象を正面から研究対象とし、これらの現象について、形容詞文、動詞文の枠組みを超えて、感情用言文の特徴と捉え、新聞記事や大規模コーパスを用いて実証的にその特徴を分析・解明し、説得力のある説明や議論を展開している。これが本研究の最も高く評価される第一の点である。第二に評価されるのは、氏を取り扱う文の多くは、ややもすれば不自然な文、非文法的な文とされることもあるような文であるが、氏は豊富なデータを用いることによって、現代日本語として決して文法的に逸脱した文ではなく、むしろ感情用言文が形容詞文と動詞文の境界的な領域に位置づけられ、そこでは統語的、意味・語彙的な環境あるいは条件の下で起こりうる現象であることを示したことである。

さらに、氏は各章で個別具体的な感情動詞や感情形容詞を取りあげて議論しているが、それらは恣意的に取りあげられているのではなく、常に感情形容詞や感情動詞全体を見渡しながらか、統語的、意味的特徴、あるいは語構成的特徴に基づくそれぞれの分類の一類として取り扱われている。このことによって、それほど一般的でない現象や副次的な現象について、アド・ホックな説明から逃れることが出来ており、単なる事例研究を超えたものになっている。これが本研究の評価される第三の点である。

以上、本論文の最も高く評価される点を三点にまとめたが、物足りないところ、未熟なところもないわけではない。例えば、各章それぞれの論考の水準や完成度は十分に高いのであるが、それぞれの章で明らかにされたことや議論されたことが必ずしも有機的に関連していないことも多く、全体としてまとまりに欠ける点は、本論文の瑕疵と言える。提出論文の最後に「まとめ」としての一節があるが、そこでの論述も十分とはいえない。加えて、「現代語」といいながら実際に分析の俎上にあがっているのは和語の動詞・形容詞に偏り、漢語動詞・形容詞はほとんど扱われていない。例文もほぼ書き言葉に限られていて、これらの偏りに対する配慮が周到になされているわけではない。また「他動性」という観点から感情用言の体系化を進めるにあたって、「他動性」の緻密な検討が足りないなどの未熟な点も見受けられた。これらについては、口頭試問でも審査委員から指摘されたところである。課題の残るところであるが、氏の今後の研鑽が大いに期待される場所でもあり、上のような足りないところがあるにせよ、課程博士論文としての水準は十分に満たしていると評価される。

本論文審査委員三名は、論文の審査、並びに2015年2月13日に行われた公開論文発表会、口頭試問の結果、

学位申請論文「現代語における感情用言の形式と意味」は「博士（言語学）」の学位を受けるに十分に値すると判断するものである。